



松山市が生んだ文学者
正岡子規。幼少期はスポーツをするタイプではなかったが、大学を目指して上京後、野球に熱中する。日本に野球が導入された明治20年ごろで、子規は19〜23歳だった。

6月10日の取材会では、松山市子規記念博物館の常設展示から、子規の野球への熱意を知った。

学芸員の平岡瑛二さん(36)の説明では、ポシジョンは捕手。「子規は句会でみんなと議論するの

松山中央高



正岡子規が野球好きだったことを説明する平岡学芸員(右)
—撮影・松浦諒

松山「野球文化」①

子規熱中普及に貢献

が好きでリーダー格だった。だから仲間に指示をたした子規。様々なペンする捕手が向いていたのでは」と分析した。

2002年には、野球の普及に大いに貢献した。短歌「今やかの三つベースに人満ちてそぞろに胸のうちさわかかな子規。今では珍しい左な」、俳句「草茂みベー利きの捕手だった。実際はつまかったかどうかわからないという。

「ぼる」をもちった「野球(の・ぼる)」があ説「山吹の一枝」など、数々の作品も残している。(向井琴未、関谷真由) < 随時掲載します >

目線 放送部、写真部



野球と子規の関わりを知ることができた。野球に関するたくさんの俳句や短歌からは、子規の愛情が感じられた。野球王国愛媛の基礎はここから築かれてきたんだと確信した。

(K、A)

タイトルカットは松山南高砥部分校デザイン科制作。
高校生記者の活動は愛顔(えがお)スポーツ応援アプリ(愛媛新聞ONLINEアプリ)で随時更新。

